

審査の結果の要旨

氏名 辻谷真知子

人の集団には、従うべきことがらとして共有されている多様な社会規範がある。本論文は、この規範を子どもが最初に学ぶ場として保育施設を対象にし、幼児が園生活を通して規範をどのように捉えそれを他者に言動として示しているのか、その変容と幼児間の関係性の関連を検討した研究である。論文は、全4部10章から構成される。

第I部第1章では、保育における規範に関する研究、幼児期における規範意識の発達研究、規範を示す言動と幼児間の関係性に関する研究を概括している。そして、3-5歳時期の個人の規範意識の発達過程と保育の場での幼児間の長期的な関係性と規範を示す言動との関係を捉えるという本研究の課題を導出している。続く第2章では、方法として、面接法と参与観察法の具体的な方法や手順と意義を論じている。第3章では、研究の中心概念となる「規範を示す言動」についての定義とその言動の分類方法、および本論文の構成を論じている。

第II部では、幼児個人による規範の捉え方を検討している。第4章(研究1)では、4歳児1クラス(N=34)で6カ月間に収集した342事例とそのうち根拠を示した42事例から、4歳児は規範について根拠も捉えて示しており、その規範は他者との間で機能しうるものであること、ただし集団で共有されている園やクラスの規範については、根拠に言及しない場合も多いことを示している。第5章(研究2)では、3-5歳児1611名に2回の面接調査を実施し、3歳から4歳にかけて規範の違反結果の推測が可能となり、5歳では推測内容が精緻化するとともに第三者の他児を想定することが可能となることを明らかにしている。そして第6章(研究3)では、第5章で判断の結果が異なり、規範を示す言動の多い2名についての観察事例を抽出し、可否の確認の多い幼児と、主張や根拠を示すことの多い幼児の存在を示し、他者をどのようにどの程度判断基準にするのかの点で異なることを指摘している。

第III部では、集団内における幼児の規範の捉え方と示し方および幼児間の関係性の変容との関連を検討している。第7章(研究4)では、4歳児2年分50事例の観察データから、幼児は他児や保育者に許可を求めることで規範の判断基準としていること、ただしその判断は相手の応答により異なる可能性を示している。そして第8章(研究5)では、3歳時から卒園時までの16名の観察事例から、根拠を示さない事例738事例と言葉遣いに関する規範41事例を検討し、相手に従わせる意図だけではなく自分の主張や反論を伝える際に言葉遣いの規範を方略的に示すこと、また根拠なく示した規範も幼児間では共有されることを明らかにしている。そして第9章(研究6)では、加齢に伴い規範を示すことが増える幼児と他児の規範に従うことが増える幼児がいることを示し、規範を示す幼児と示される幼児との間で規範が変容することや他者をどのように基準にするかで変容することを明らかにしている。そして、第IV部第10章の総合考察では、上記6研究の知見をもとに、幼児個人の規範理解の発達と示し方の変容過程、そして集団で規範が共有されるメカニズムのモデルを提示し、本研究の意義と課題を論じている。

本論文は、規範に関して幼児同士の関係と言動に着眼した精緻な分析から知見を出した点で独自性が高く、保育学の新たな可能性を拓く実践研究と高く評価できる。よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するに、十分にふさわしい水準にあると判断された。